

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520463

研究課題名（和文）近世辞書の学際的・社会史的研究のための調査と基礎情報の収集

研究課題名（英文）Basic research on modern dictionary for interdisciplinary and social historical approach

研究代表者

佐藤 貴裕 (SATO TAKAHIRO)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：00196247

研究成果の概要（和文）：近世辞書のなかでもっとも広く利用された「節用集」を中心に、書誌学的な基礎情報の収集をおこなった。これまでは図書館蔵本の調査が中心であったが、新たに博物館・文書館・歴史資料館などでも積極的に調査をおこなった。その結果、新発見の節用集5点、異版の発見7件、辞書貸借の実態資料ほか、新たな知見の集積をおこなうことができた。これらの調査も踏まえつつ、近世節用集の展開を記述する論考5点を発表した。かたわら、約100点の原本を収集し、一部をweb上で公開することができた。

研究成果の概要（英文）：I collected bibliographical basic intelligence focusing on the "Setsuyo-shu"(節用集) used most widely in a modern dictionary. Although I investigated at library books in the mainstream until now, newly positively at the museum, the document hall and the history scientific library also. As a result, I accumulated new knowledge besides discovery of new 5 "Setsuyo-shu", seven discovery of a different edition, and the actual condition data of a dictionary loan. On these investigations, I wrote five papers which describe deployment of modern "Setsuyo-shu". And I collected the originals of about 100, and exhibited the part on web.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史・辞書史・言語生活史

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、隣接諸分野が近世辞書に注目している。文明史の視点ながら光学的分析を試みたり（横山俊夫ら）、辞書付録中の挿絵を歴史学史料としたり（杉本史子）、『新日本古典文学大系』（岩波書店）の近世文学各巻の

施注に近世辞書を頻繁に援用したりする。近世史学では、庶民層の思想形成過程を解明するために識字・読書に注目している。多様な視点から、多彩な方法が展開されており、学ぶべき点も多い。

(2) これに対して、近世の日本語学の辞書研究には次のような問題があり、相対的な立

ち遅れが目につく。

- ①言語面・系統面に視点が固定しており、近世社会に位置づけようとする志向が少ない。
- ②隣接諸分野に提供できる、辞書をめぐる学的情報の基本的蓄積が必ずしも十分でない。
- ③よって、日本語学的な辞書研究が、学際的辞書研究のリーダー足りうるか不安がある。

(3) そもそも日本語学では辞書を言語生活のなかに位置づけてきたが(時枝誠記)、近世辞書では手薄であり、中世辞書での実践(安田章)を模範として充実をはかる。たとえば、以前、特定位相の辞書使用を検討したが(佐藤)、隣接諸分野と一層の連携を視野に、発展的な検討を行うことが、喫緊の重要課題だと認識するにいたった。

2. 研究の目的

(1) 近世辞書の存在意義・価値を、広く近世史・言語生活史を見渡したうえでの確に捉えることを最終目標とする。

(2) その過程で必要な情報収集をおこなう。ことに、隣接分野との緊密な連携を意識した、辞書を中心とした知的行為の文化史学を構想・形成し、そのリーダー的存在として日本語学・国語学が位置しうるための学的情報の蓄積・提供を見据えた基礎的・試験的調査を行う。

①基礎情報の集積 新たな異本の発見と存在の予測、節用集諸本の系統研究の点検・整理を行なう。17世紀諸本について継続的に進めるとともに、18世紀以降の諸本にも漸次およぼす。

②隣接諸分野の知見の整理 補うべき情報と新たな視点を発見のため、隣接諸分野の中心的な雑誌・機関誌などから最新の言語生活像を整理し、日本語学の求める像との差分を特定する。

3. 研究の方法

(1) 基本情報の蓄積として、近世辞書諸本の個々の書誌情報(汎用データ、個別データ)の集積と、新たな異本の発見のために臨地調査を実施する。

①多くの辞書資料を収集している、主要図書館にて臨地調査を行なう。これらについては、すでに目録類がそなわり、一定の情報がまとめられている。が、それらは、書誌学者がおこなったり、不慣れた図書館員によるデータであったりするのが通例であって、日本語学において構想されるような辞書史的視点からの調査ではない。今回、これを見直すことに注力するのである。

②また、これまで調査をおこなってこなかった、博物館・文書館・歴史資料館などでの臨地調査をおこなう。これらの施設でも、一定の情報を盛りこんだ目録類を発行・公開している場合が少なくない。が、それらの施設で

は、社会学・歴史的な視点からの記述であり、ことに古文書の一つとして処理されることが多い。したがって、図書館等における「書籍としての目録整備」がほぼなされていないため、図書館蔵の辞書類以上に、時間をつやさざるをえない。

③なお、博物館等では、家別の古文書の一つとして近世辞書が保管されているため、言語生活史的に考察するにはかえって好都合である。また、古文書目録を作成する際には、旧所蔵家の社会的・地域的位置づけがほぼ必ずなされていることでもあるので、積極的に臨地調査を実施することとする。

(2) 昨今、近世史学・思想史学では、近世人の思想形成に与えた書籍の役割を見直しつつあり、急速にその方面の蓄積を進めている。そうした動きをも的確に取り込むべく、近世史・地方史などを主体とした歴史関係学会機関誌への目配りをおこなっていく。

4. 研究成果

(1) 2010年度

①当初予定した研究計画のうち、2に述べる事情により、「基本情報の蓄積」(近世辞書諸本の書誌情報の集積)に注力することとなった。調査を予定していた各大学附属・各都道府県立図書館等の蔵書は、書籍としての完全性や美的観点から所蔵されがちであり、必ずしも近世における通常の状態を反映するとはかぎらないことが分かってきた。もちろん、現存書は数が限られるから、それらへの調査を続ける意義は小さくない。

②一方、新たな注目が浮上した。各都道府県や政令指定都市の文書館・歴史資料館等における、その土地土地の旧家・名家等の古文書を一括収蔵するなかにも含まれる近世辞書である。古文書目録が家ごとに作成されつつあり、付される解題からは旧蔵者の社会的位置づけが知られるのは、本研究にとって有益である。反面、文書館等の担当者が歴史学出身であるため、書籍の扱いに図書館並みの精度が求めにくいことがある。書名の採り方一つをとっても問題があり、臨地調査しなければ当該書が辞書であるかどうかすら明確にできない場合もある。このため、予定外の時間と手間を要し、他の研究計画を圧迫することとなった。

③上述の調査の成果としては、埼玉県文書館において『永代節用重宝無尽蔵』(宝永元年ごろ刊)・『年代節用集万宝大成』(享保9年刊)、国立歴史民俗博物館において『大万歳節用集』(元禄中頃刊)、石川県立博物館において『真草二行節用集』(寛文3年刊)等、従来知られていなかった諸本に調査・検討を加えることができた。また、雑誌論文2篇においては、近世節用集の展開について17世紀と19世紀の分について詳述できた。なお、

通史・方法論を俯瞰的に述べた。

④近世辞書の原本について、節用集類 20 本、漢字辞書等 14 本を収集した。このなかには、草書本『節用集』（再版本系）など、比較的重要なものを含む。

⑤学会発表 2 件では、言語生活史と近世辞書との関わりを俯瞰するものと書名の変遷を説いたものがある。論文 2 点では、18 世紀の検索法変革が 19 世紀にどのように影響したか、および 17 世紀の節用集がどのように室町時代の節用集から脱化したかについて論じた。

（2）2011 年度

①当初計画の第一にかかげた、近世辞書諸本の書誌情報の収集は、福岡県立図書館・福岡市立中央図書館・千葉県立文書館・千葉県立図書館・埼玉県立文書館・小松市立博物館・小松市立図書館・富山市立図書館・国文学研究資料館にておこなった（本研究計画研究費の以外の資金によるものも含む）。特徴的な知見を挙げれば、これらの図書館等ではいずれも 19 世紀の大型本節用集を所蔵するため、各種の比較検討をおこなうことができ、その改修実態・利用様態の一端を知ることができた。

②『倭節用集悉改囊』1818 年刊本は、巻頭付録に一部版木を削除したと推測される部分があるが、小松市博本の 2 本がともに削除のない本であったことから、この削除はすでに販売段階にはいったなかでの改修であることが確認できた。さらに小松市博本 2 本間でも記事に異同が確認されたので、都合少なくとも 3 種の異本の存することが知られた。『永代節用無尽蔵』1831 年版でも一部記事の異同が認められた。

③小松市立図書館蔵『倭節用集悉改大全』には、当該本の貸出先名簿が付されており、利用層が推測された（ただし近代のもの）。

④近世辞書資料そのものの収集もおこなうことができた。早引節用集 B 類の嚆矢である『〔増字百倍〕早引節用集』1760 年版、17 世紀の主流であった本文・体裁をもつ『豊栄節用世宝蔵』の 1823 年求版といった節用集史上興味深いもののほか節用集 15 本、漢字字典 5 本、以呂波韻 1 本、四書五経字引 6 本、その他関係書 5 本など、計 32 本を収集しえた。

⑤論文は 2 件。『珠玉節用万代宝匣』という特徴的な節用集につき、その原拠を明らかにし、書名に込められた編者の思惑を推定し、書名史上の特異な位置を明らかにした。また、近世節用集の書名の全貌について、字数と基称「節用集・節用」の変移を中心に論じ、18 世紀前半の特異な現れを浮き彫りにした。

⑥一昨年度の調査により、国立歴史民俗博物館蔵の易林本『節用集』が、元来、九州大学附属図書館蔵本であることが明らかになっ

たが、ただちに両館にその事実を報告したところ、平成 24 年 3 月に九州大学に返還されることとなった。本計画の研究趣旨とは異なることだが、社会的貢献をも果たすことになった。

（3）2012 年度

①書誌的情報の収集では、京都大学・国立国語研究所・栃木県立文書館・関市立図書館・国際日本文化センター・埼玉県立文書館・神奈川県立文書館・国文学研究資料館で節用集類を中心に調査した。主な成果に、『倭漢節用無双囊』天明 4 年版に 2 種（付録内容の差と別種跋文）あるほか、『〔世用万倍〕早引大節用集』文化 6 年刊版に 3 系統 5 種あることなどの新事実を確認した。

②これらの調査に付随する知見として、『和漢音積書言字考節用集』と、その早引節用集への改編本『〔早引〕永代節用集』との語形対照索引が 1875 年イタリアにて刊行されたことが知られた。

③また、17 世紀初頭の節用集においては、まだ本格的には御家流（青蓮院流）の書風を帯びることが少ないように印象されるので、今後の課題として、書流への目配りの必要性を挙げておく。

④原本資料については新たに 45 本を収集した（節用集 22 種（17 世紀刊本 5、18 世紀刊本 7、19 世紀刊本 11）、漢和系ほか 20（字典 3、韻書 5、字解書 3、詩作書 2、国語系 2、書翰作法 5）。このなかには、他に東京大学国語学研究室蔵本しか知られない『真草二行節用集』両点本や、同名書が多く今後検討の要のある『頭書増補節用集大全』2 本、『倭節用悉改囊』（宝暦刊本か）の大正期写本など、今後の研究に重要かつ興味深いものが含まれる。

⑤成果の公表としては、論文「近世節用集の教養書化期」がある。本年度およびこれまでの調査でえた知見を総合し、17 世紀末から 18 世紀前半を、近世辞書の代表的存在である節用集における大きな展開期と位置づけつつ、その意義についてプラス面ばかりが語られがちであったが、マイナス面も看過できず、むしろ近世辞書史のなかでは商業主義の影響の大きい、異様ともいえる事象が複数展開したことを指摘した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①佐藤貴裕、近世節用集の教養書化期、国語語彙史の研究 32（和泉書院）2013.03, pp.87-101, 査読有

②佐藤貴裕、近世節用集書名考——字数と基称——、国語語彙史の研究 31（和泉書院）、2012.03, pp.77-91, 査読有

- ③佐藤貴裕,『珠玉節用万代宝匣』の異相, 近代語研究 16 (武蔵野書院), 2012.03, pp.153-171, 査読無
- ④佐藤貴裕, 近世節用集の典型形成期, 国語語彙史の研究 30 (和泉書院), 2011・3, pp.173-190, 査読有
- ⑤佐藤貴裕, 検索法多様化の余燼, 近代語研究 15 (武蔵野書院), 2010・10, pp.225-241, 査読無

〔学会発表〕(計2件)

- ①佐藤貴裕「近世節用集の書名史」。2010年度第1回近代語学会研究発表会。2010年6月26日(土)白百合女子大学
- ②矢島正浩, 金澤裕之, 岡部嘉幸, 福島直恭, 佐藤貴裕「外から/外への近世語研究」(日本語学会2010年度春季大会シンポジウム報告。2010年5月29日、日本女子大学)

〔図書〕(計1件)
(共著)

- ①金澤裕之・矢島正弘編『近世語研究のパーспекティブ』(笠間書院)。佐藤貴裕「節用集と近世社会」, pp.135-152, 2011・5

〔その他〕

ホームページ等

- 佐藤貴裕管理「辞書の世界・江戸時代篇」
<http://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/rekish.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 貴裕 (SATO TAKAHIRO)
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号: 00196247

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: